

安来市造山古墳群発掘調査報告書

平成4年3月

安来市教育委員会

序

この報告書は、平成2年度及び3年度に安来市教育委員会が実施しました安来市荒島町に所在する造山古墳群の発掘調査報告書であります。

安来市内には多くの古代遺跡が存在することが知られていますが、とりわけこの荒島町周辺は県下でも著名な大型古墳が密集しているところであります。

現在、その特色を生し、自治省のふるさとづくり特別対策事業の一環として地元の皆様のご理解ご協力を得ながら造山古墳群の整備の計画を進めているところであります。

発掘調査の記録としては満足すべきものではありませんが、前記しました事業を進めるうえに、また地域の歴史をご理解いただく一助となれば幸に存じます。

最後に、調査に際しましてご理解とご協力をいただきました土地所有者をはじめ、地元の皆様に心から感謝の意を表すものであります。

平成4年3月

安来市教育委員会

教育長 三 島 俊 夫



例　　言

1. 本書は、安来市教育委員会が国・県の補助金をうけて平成3年度に実施した、安来市荒島町に所在する造山古墳群の発掘調査報告である。
2. 今回報告する造山2号墳は安来市の遺跡番号66-4で、所在する地籍は安来市荒島町字造山3,187他である。
3. 発掘調査組織は以下のとおりである。

調査主体 安来市教育委員会

調査指導 門脇等玄（安来市文化財保護委員）・野津弘雄（同）・東森市良（同）・横山純夫（同）・渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）・松村恵司（文化庁記念物課文化財調査官）・丹羽野裕（島根県教育委員会文化課文化財管理指導係主事）

事務局 三島俊夫（安来市教育委員会教育長）・市川博史（安来市教育委員会生涯学習課長）・大野雄司（安来市教育委員会生涯学習課文化係主任）

調査員 三宅博士（安来市教育委員会生涯学習課文化係長）・永見英（同主任）

調査補助員 東森普（奈良大学学生）・中西透（大阪芸術大学学生）

4. 発掘調査に際しては仲佐勝美・田川美佐夫・佐々木頼俊・増田幸・金山敬二・仲佐照三・内田大次郎・松本直樹氏など土地所有者をはじめ地元の方々に終始多大なご協力をいただいた。
5. 出土遺物については安来市教育委員会で保管している。
6. 本書の挿図中の方位は真北を指す。
7. 本書の執筆・編集は上記調査指導の先生方の助言を得ながら、永見・三宅が行なった。

目 次

1 はじめに	1
2 位置と歴史的環境	2
3 調査の概要	4
4. 検出した遺構と遺物	7
(1) IV区第2トレンチ	7
(2) IV区第1トレンチ	8
(3) IV区出土遺物	12
(4) II区第2トレンチ	12
(5) II区第3トレンチ	13
(6) II区第1トレンチ	13
(7) III区第2トレンチ	14
(8) III区第2トレンチ出土遺物	14
(9) III区第3トレンチ	18
00 III区第3トレンチ出土遺物	18
01 III区第1トレンチ	20
02 III区第1トレンチ出土遺物	20
5 小 結	20
付録 造山2号墳発掘調査	23
(1) 調査の概要	25
(2) 検出した遺構と遺物	25
造山2号墳第2トレンチ	25
造山2号墳第2トレンチ出土遺物	27
2号墳第1トレンチ	29
2号墳第1トレンチ出土遺物	31
造山2号墳第3トレンチ	33
6 ま と め	33

1. はじめに

今回発掘調査を実施した荒島町字造山周辺は、造山1号墳から竪穴式石室が発見され、その中から銅鏡が出土したことから、昭和11年12月16日に国指定史跡となり、以来出雲地方を代表する古墳として注目されるようになった。昭和20年代には、島根大学の山本清氏の調査によって同丘陵に前方後方墳である造山2号墳や方墳である造山3号墳の所在が明らかとなり、大型の古墳が群集する丘陵として学術上極めて重要な地域として位置づけられるようになった。その後、島根大学によって、造山古墳の測量など調査が続けられたが、昭和41年8月には山本清氏を団長として島根県教育委員会によって、造山3号墳の発掘調査が実施され、前期の方墳として、同古墳の全容をほぼ明らかにされるようになった。この調査によって、昭和41年5月31日、造山3号墳は島根県指定文化財となつた。

安来市においては、昭和54年に作成された基本構想の中に造山古墳群の重要性と将来整備が必要



第1図 造山古墳群周辺主要遺跡分布図

1:25000

- 1 造山2号墳 2 造山4号墳 3 造山1号墳 4 造山3号墳 5 造山5号墳 6 大成古墳
7 仏山古墳 8 高塚山古墳 9 塩津1号墳 10 塩津神社古墳 11 若塚古墳 12 仲仙寺古墳群
13 仲仙寺宮山支群・宮山1号墳 15 西荒島古墳群 16 日白横穴群

な地域と位置付けた。昭和62年度には、自治省のリーディングプロジェクト事業の採択によって、安来市は「神話と鉄学の道」事業を開始した。その付帯事業（仮称）安来風土記の里整備事業として、造山古墳群の整備が計画され、平成元年度には、造山古墳など現在知られている古墳の測量調査を実施した。そして、現在整備事業が進められているところである。

この古墳群の重要性を明らかにし、現在行われている整備事業終了後の活用を継続していくため、古墳群が所在する範囲を史跡とする事が必要である。今回の発掘調査は、不明確であった造山4号墳の調査を国庫補助を得て実施したものである。これに先立ち、平成3年3月には前方後方墳で前方部の形が不明確である造山2号墳の調査を実施し、葺石が検出されるなど貴重な資料を得ることができた。

2. 位置と歴史的環境

今回調査を実施した造山4号墳及び同2号墳は安来市の西端、標高約50mの丘陵上に位置している。今ここに立つと、北方には波静かな中海が広がり島根半島や弓浜半島さらに大根島が展開し、また東方に眼を転じると秀峰大山を遠望することができる。

この安来市西端一帯は四隅突出形墳墓として著名な国指定史跡仲仙寺古墳群や同形態の大規模なものとして注目される塩津墳墓などの他、これから記そうとする前期大型古墳が密集して築造されている地域である。

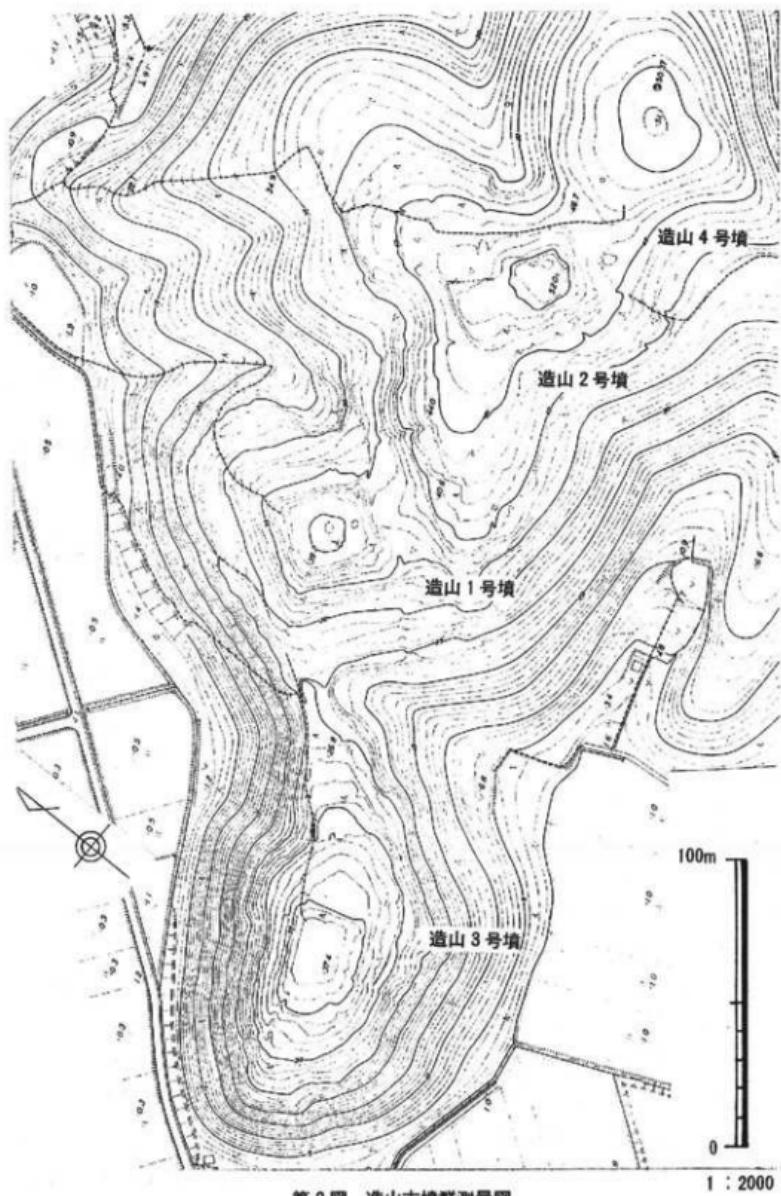
造山古墳群は計4基によって構成され1号墳・3号墳は古墳時代前期に属すもので、2号・4号墳は後期の初頭ごろと推定される。以下造山丘陵周辺の古墳を、前期のものから順次時期を追って紹介することにしよう。

造山1号墳は国指定史跡となっているもので、60m×60m、高さ10mを測る方墳である。

埋葬施設は狭長な1号竪穴式石室・小形の2号竪穴式石室があることが知られている。1号石室内からは副葬品として仿製方格規矩鏡1、同三角縁三神三獣帶鏡1、ガラス製管玉、鉄刀などが出土している。

造山3号墳は県指定史跡となっている方墳で、先の造山1号墳の南西方向に位置している。その規模は39m×31m、高さ4mを測り、埋葬施設は中央やや南により狭長な竪穴式石室1が知られている。石室内からは副葬品として舶載の斜縁二神二獣鏡1、碧玉製管玉30、ガラス小玉33、刀子1、鉈1が出土している。

この造山古墳群の東北方向の丘陵上に大成古墳がある。大成古墳は45m×45m、高さ6mの方墳で、埋葬施設としては中央やや南により狭長な竪穴式石室1が設かれている。副葬品としては舶載の三角縁二神二獣鏡1、素環頭大刀1、小形丸底壺3、低脚壺2などが出土している。



第2図 造山古墳群測量図

1 : 2000

大成古墳は副葬品の組成から造山1号、同3号墳に先行する前期古墳とができるよう。これら前期古墳に続くものとしては現在は存在しないが全長52mを測る前方後方墳である宮山1号墳や造山2号墳があげられる。ただ近年知られるようになった西荒島古墳群中の1基は墳形は不明とは言え、葺石を完備し、埴輪も採集されている。¹⁷この埴輪は製作技法からすると造山2号墳に先行する可能性が大きいものである。

仏山古墳は、大成古墳の東に位置する推定長50mを測る前方後方墳である。箱式石棺様の埋葬施設があったとされている。副葬品としては獅噛環頭大刀・剣菱形杏葉などがあり、後期でも古い組成のものということができる。

塩津神社古墳は市指定史跡となっているもので、墳丘盛土は流出しているものの、出雲東部に多い典型的な石棺式石室である。¹⁸

塩津神社古墳の築造時期には横穴も各所につくられ、日白横穴群は荒島石に穿たれた整美なものとして注目に値する。

以上、主要遺跡の分布を略記したが、造山古墳群周辺において古墳時代全期を通して大型古墳が築造され続いている事実は、ここが政治的にも重要な位置を占めていたことをうかがわせるものがある。

3. 調査の概要

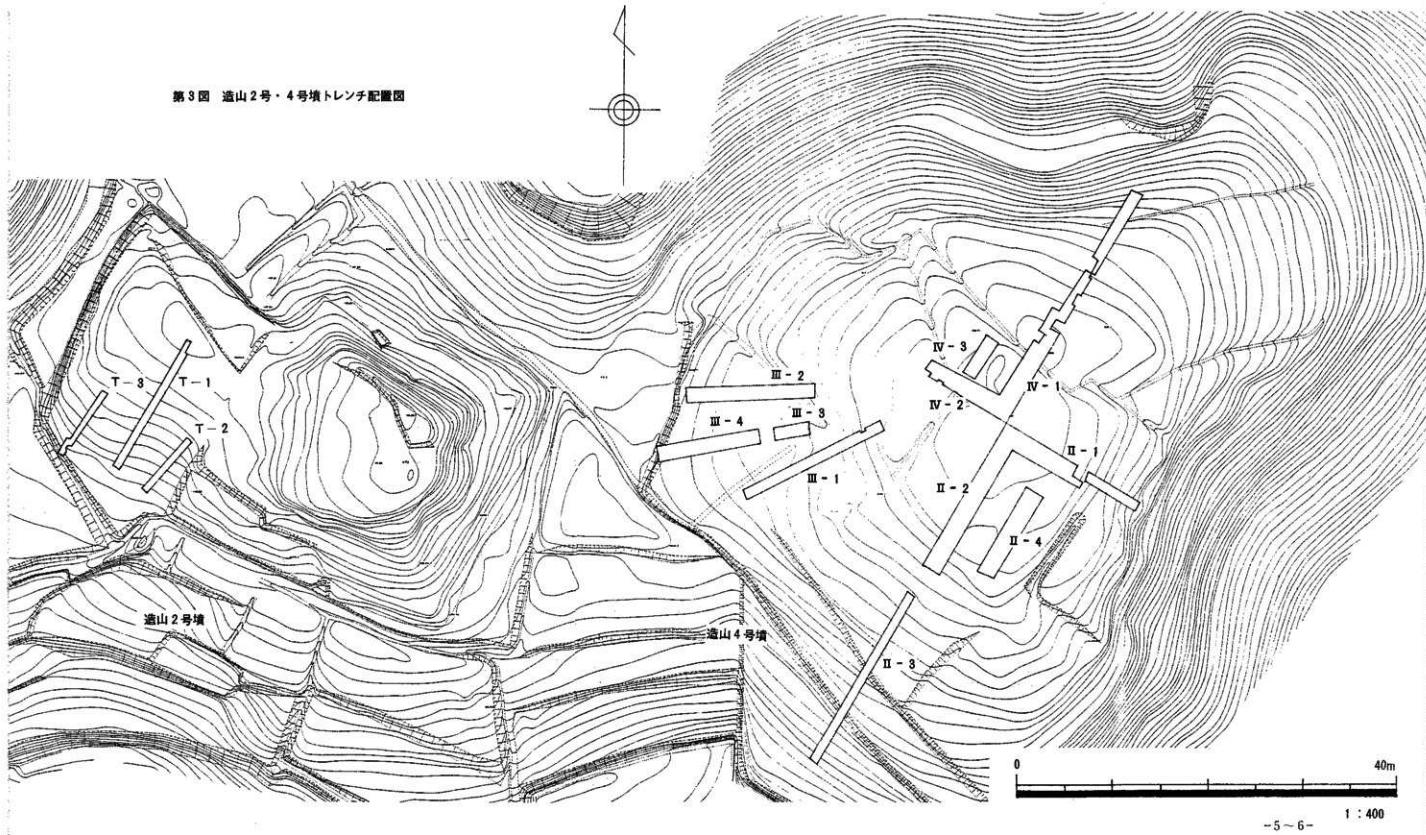
造山4号墳の発掘調査は平成3年7月22日から同年9月13日までの間実施した。発掘調査に際しては、まず墳形と所属時期の確認を最優先とし、仮に埋葬施設を確認したとしても最小限の調査にとどめる方針で行なうこととした。造山4号墳と称されてきた高まりはかつて畠として耕作されていたところである。上面は耕作などによって、若干起伏はあるものの全体には平坦となっており、平板測量図面の観察からすると見かけ上、45m×35mを測る方形墳と考えられた。

そこで墳丘中央を貫く長軸線N-30-Eと、その中心で直交する軸線を設定し、墳丘を4区画に分割した。そして北東隅の区画から時計回りにⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区とし、各トレンチの呼称については各区名を冠し、調査順に番号を付すこととした。

Ⅱ区・Ⅲ区の各トレンチでは、表土を除去すると下は地山となっていた。Ⅱ区第2トレンチでは念のため中央付近を深く掘り抜いて下層を観察することとした。結果はやはり地山に相違ないと判断された。Ⅳ区第1トレンチでは中央交点から北東へ16mの地点で、若干の須恵器片及び滑石製管玉未完成品が出土した。この他各トレンチで精査を試みたが、耕作による溝が若干みられるにとどまった。

この時点では造山4号墳は実在しないことも考慮せざるを得ない状況であった。一応Ⅲ区に2本のトレンチを設定したところ、溝状遺構内で多数の埴輪片が確認された。埴輪はいずれも円筒形を呈すもので、Ⅲ区第1トレンチで1本、同第2トレンチで2本、同第3トレンチで1本が直立した

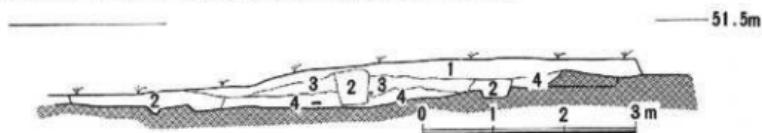
第3図 造山2号・4号墳トレンチ配置図



かたちで出土した。これらは約1m間隔でめぐらされているものと推定された。この埴輪に囲まれた区画がどのような形態となるかが問題になるところであった。しかし時間的制約もあり、溝状遺構が「L」字形に屈曲していることの確認の他は明確にするに至らなかった。大略以上のような結果をもって、9月13日埋めもどしを含め現地での調査を終了することとした。

4 検出した遺構と遺物

ここでは今回調査を実施した各トレンチの状況について記述することとする。記述の順序としては東方の各トレンチのうち、遺物の出土したIV区第2トレンチ、IV区第1トレンチを先に遺物や頗るな遺構の認められなかつたII区第2トレンチ、II区第3トレンチ、II区第1トレンチを後に行なうこととした。III区については後半にまとめて記述することとした。

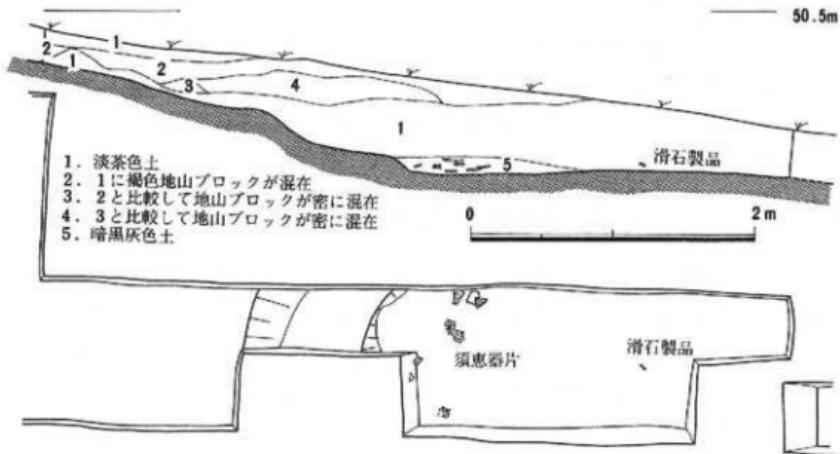


1. 淡茶色土
2. 茶灰色土(砂まじり、よくしまっている)
3. 2と4が混在
4. 暗黒灰色(粘性あり)

第4図 造山4号墳IV区第2トレンチ土層図

(1)IV区第2トレンチ このトレンチはIV区のうち、これまで造山4号墳の墳頂と考えられていた中央付近に東西方向に設定したものである。幅2m・長8mを測り、東端はIV区第1トレンチの南端と接している。図示した土層図(第4図)は北壁であるが、表土の淡茶色土を除去すると、耕作に関係すると考えられる溝状の遺構が3条認められた。この溝状遺構は他のトレンチでも認められ、いずれも断面逆台形を呈すものである。ここで検出した溝状遺構は定規で引いたように整然と平行に掘り込まれ、底面のレベルも一応そろえようとする意図があるよう見受けられる。三者の中心からの距離は2mを測る。内部の堆積土は茶灰色土一層で、よくしまっており、遺物は全く認められない。

この下層には第2トレンチ北壁に沿って東西に細長い落ち込みが認められた。西端は先の溝状遺構によって損われているため、全長を知ることはできないが残長4.8m・幅0.6m前後を測る。内部に堆積した土は暗黒灰色を呈し、中から須恵器片(第7図-10)1点が出土した。ただしこの落ち込みが人工的なものであるか否かは断定しがたいものであった。



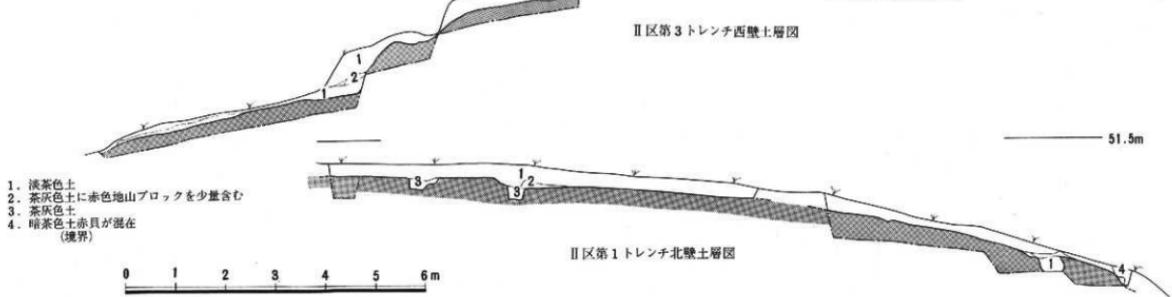
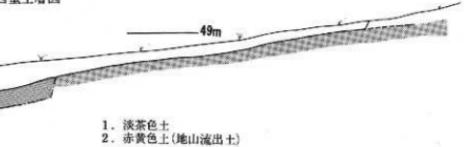
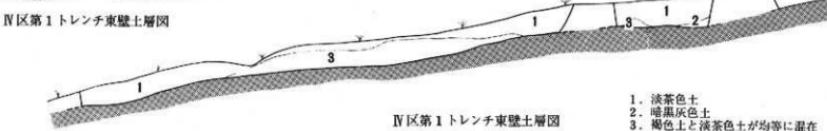
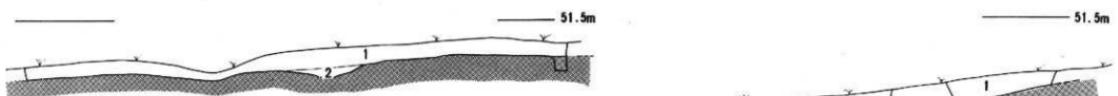
第5図 造山4号墳IV区第1トレンチ遺物出土状態実測図

(2)IV区第1トレンチ このトレンチは先の第2トレンチと「L」字状に接するように北方へ延長したものである。このトレンチの中央部分は植林を避けたため、屈曲した形となったが、IV区とII区の交点から北方へ16mの位置で須恵器片・滑石製品が出土した。

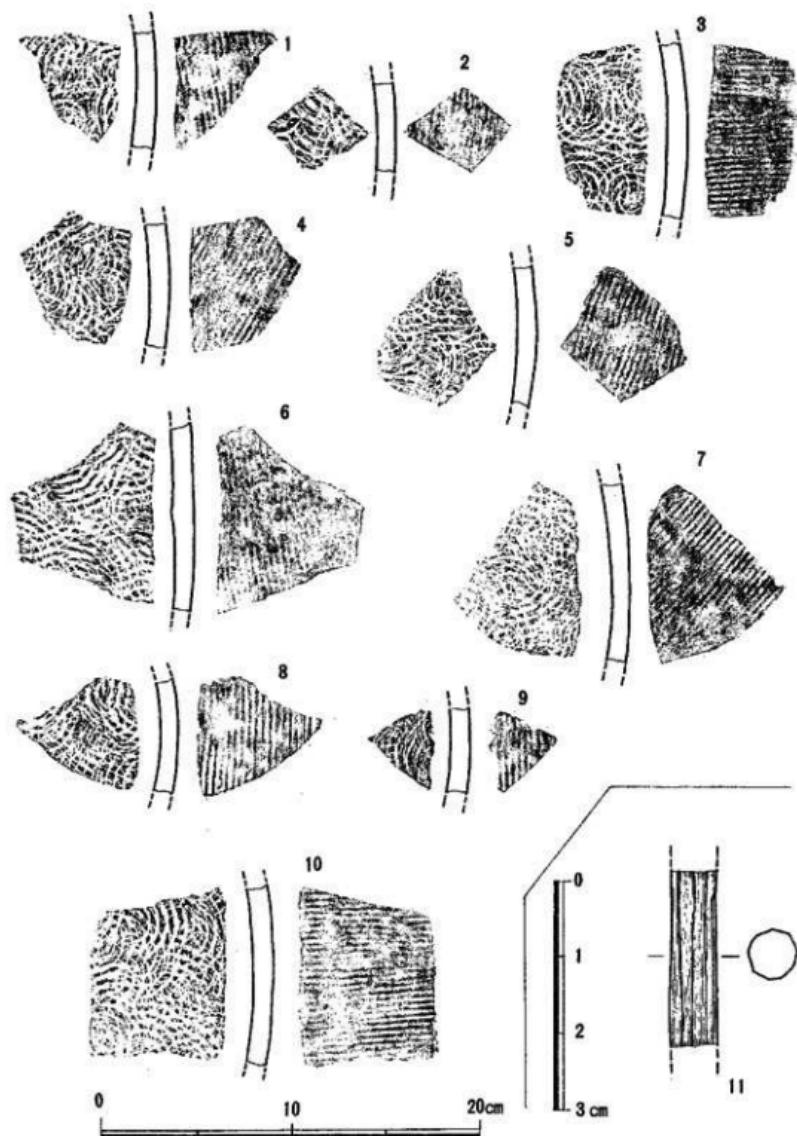
出土状態は第5図・図版1下段に示すとおりで、北方へ向かってゆるやかに下降する丘陵の一部に若干のくぼみがあり、そのくぼみには暗黒灰色土が堆積していた。須恵器片はこの土中から出土した。これら須恵器片はいずれも地山面からやや浮いた状態であった。

須恵器片を包含する暗黒灰色土の上層は厚さ約0.5mの淡茶色土が堆積していた。この淡茶色土は造山4号墳周辺の表土（耕作土）として共通しているものである。丘陵頂部側では表土と認識された土層の上に淡茶色土に褐色地山ブロックが混在する土層が3種も堆積している事実は、このあたり一帯が植林などによってかなり擾乱を受けていることを示している。須恵器片の北方で滑石製管玉未成品が出土したが、これは表土層であるところの淡茶色土中に含まれるもので、原位置を保つていないと判断された。須恵器片が出土した落ち込み中に堆積する暗黒灰色土層も上面は削平されているものと推定された。ただし、この落ち込みが人工的なものであるか否かは断定しがたいものであった。

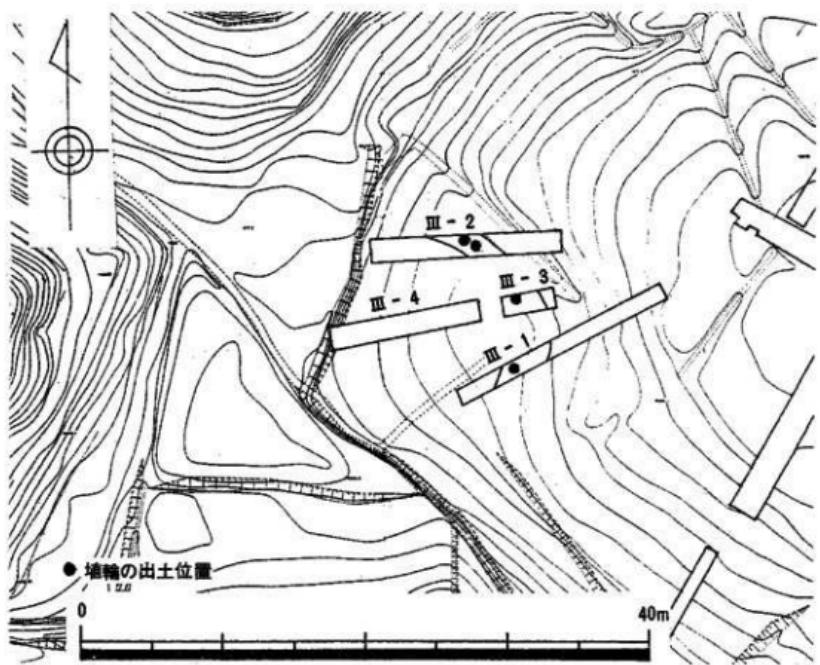
このIV区第1トレンチは須恵器片・滑石製管玉未成品出土位置の北側（丘陵北側斜面）も褐色土と淡茶色土が均等に混在する層や、表土層が地山面に直接堆積していることから、かなり削平されているものと判断された。ところで、このトレンチを設定した目的は埋葬施設の位置や丘陵北辺の



第6図 造山4号墳IV区・II区トレンチ土層実測図



第7図 造山4号墳IV区出土遺物実測図



第8図 造山4号墳Ⅲ区トレンチ配置図

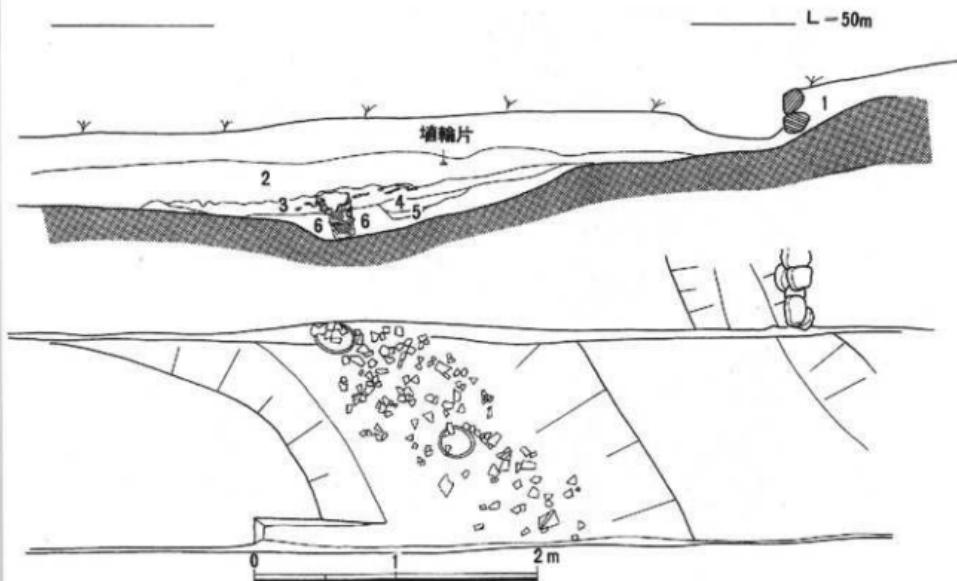
墳丘加工痕跡を確認することであったが、両者は存在しないと判断された。

(3)IV区出土遺物（第7図）、IV区出土遺物はIV区第2トレンチ内出土須恵器（第7図10）の他、第1トレンチ内出土須恵器片（第7図1～9）、滑石製管玉未成品（同11）がある。

須恵器片はいずれも内外面淡灰色を呈し焼成は良好で、外面は格子ふうの叩目文、内面は同心円文の重複が認められる。外面には淡灰色を呈す自然釉が付着している。これらのうち(5)と(7)は接合することができ、同一個体であることを確認した。これら破片は焼成・叩目文やあて具痕跡、器厚等から第1トレンチ・第2トレンチ出土のものも含めて同一個体である可能性が高いと推定された。

滑石製管玉未成品は両端を欠損しているが残存長2.3cm・径0.5cmを測り、断面多角形を呈す。全体に淡灰色を示し、縦方向に稜線や研磨痕が認められる。この滑石製管玉未成品は前述したように付近から須恵器片が出土しているが、層位的には共伴するとはいがたいものであった。

(4)II区第2トレンチ このトレンチはこれまで造山4号墳の墳頂と考えられていた中央平坦面のうち、南半部に設定したもので、IV区第1トレンチの南西方向延長線上にあたる。表土約20cmを除去



第9図 遺山4号墳Ⅲ区第2トレンチ埴輪出土状態実測図

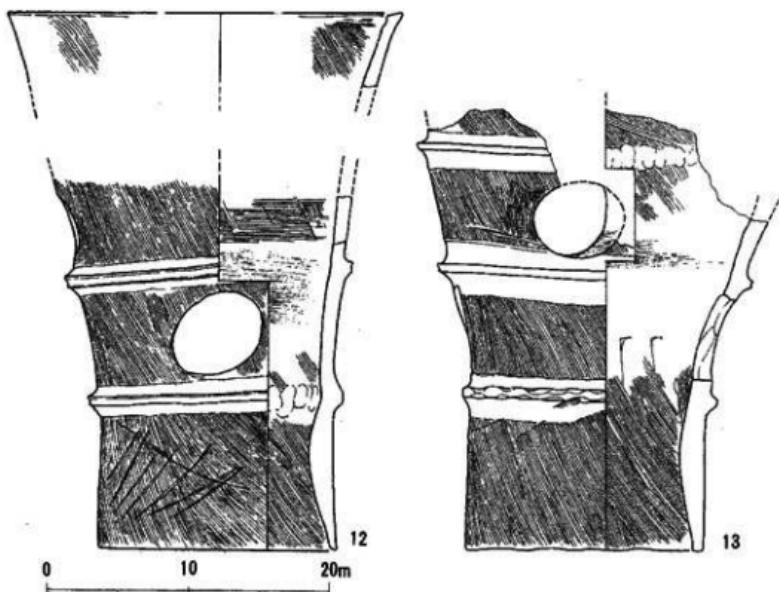
するとその下は明黄色の堅緻な地山となっていた。念のため、表土下50~80cmまで掘り抜いたが同様な地山層で、遺構や遺物は認められなかった。

(5) II区第3トレンチ 前述したII区第2トレンチの南西方向延長線上に設定したもので、表土を除去するとその下は明黄色の堅緻な地山であって、埴丘を形成するための加工等は認められなかった。

トレンチ南西端部で階段状に地山を掘り抜いて土層観察を行なった。一部で表土の上に地山土が乗り、さらにその上に表土が乗るといった土層堆積が認められたが、これは耕作による搅乱と判断された。

(6) II区第1トレンチ 先のII区第2トレンチの北端で「L」字状に接するよう略東西方向に設定したものである。表土約20cmを除去すると下は堅緻な地山となっていた。この地山面にはIV区第2トレンチで検出したと同様な、断面逆台形を呈す溝が2条認められた。底のレベルに約20cmの差があるものの、両者の中心からの距離は2mを測り、平行に掘られている点など同じ意図によった溝であろうと考えられた。このトレンチにおいても埴丘の形成を意図する加工は認められなかった。

なおトレンチ東端は丘陵の傾斜変換点となっており、赤貝を含む暗茶色土の堆積が認められた。

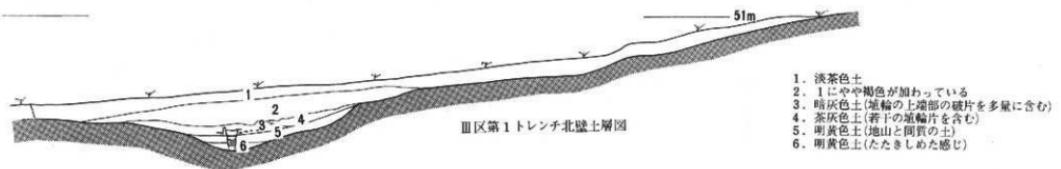
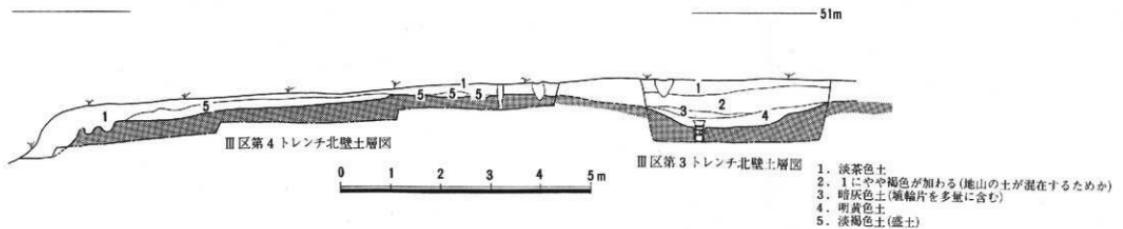
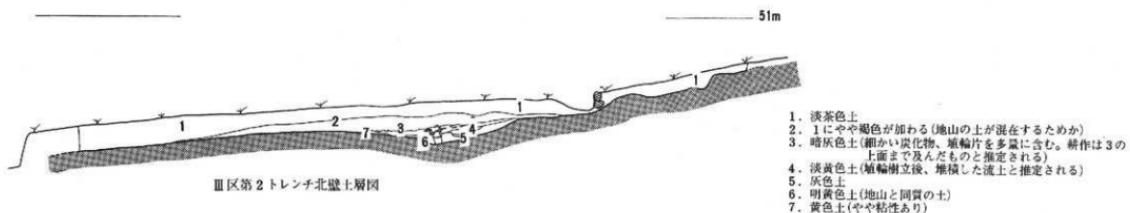


第10図 造山4号墳III区第2トレンチ出土埴輪実測図

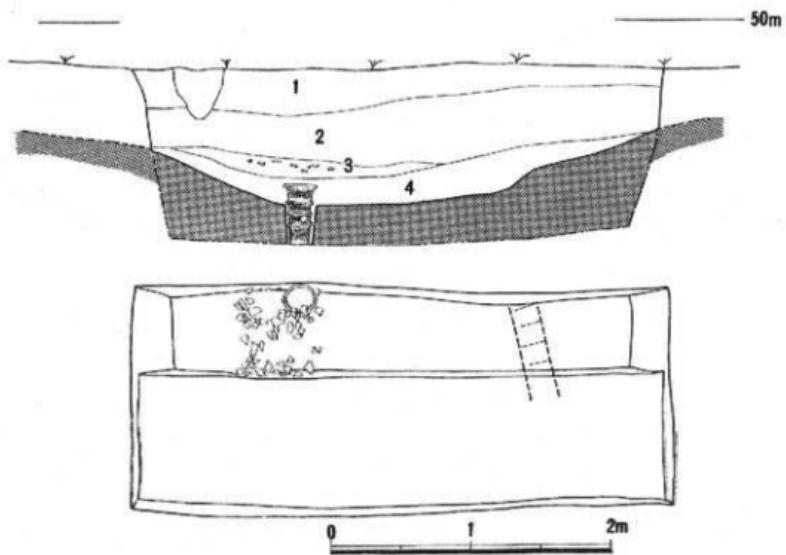
この地点が土地の境界であることを示すものであった。

(7)Ⅲ区第2トレンチ このトレンチはⅢ区で設定した3ヶ所のうち、最も北側に位置するものである。表土約30cmを除去すると、下は茶褐色土となっており、若干の埴輪片が認められた。この層を除去するとトレンチ中央で夥しい埴輪片が出土した。これらの埴輪片は幅約2.5mを測る溝状構内に集中して認められた。この溝状構は断面Ⅲ形を呈すもので、底部中央で円筒形埴輪が2本立った状態で出土した。両者の距離は約1mであった。埴輪はいずれも上半部が破損しており、これは第3層の暗灰色土上面まで耕作の手が及んだことを示している。土層の観察からすると、これらの埴輪は溝状構の底面にえ置かれた後、基部及び、第2条タガの下端あたりまで地山土を用いて埋めもどすかたちで並べられたものと推定された。

(8)Ⅲ区第2トレンチ出土遺物 このトレンチで検出し遺物には夥しい埴輪片と、2本分の円筒形埴輪下半部がある。(第10図12)はトレンチ中央から出土したもので、小片ながら口縁部が内部の土に混って認められた。上半部を欠損しているが残存高26cm、基部の径17cmを測る。タガは断面台形を呈す2条が認められるが、本来はさらに上段に1条存在したと推定される。第1条タガと第2条タ

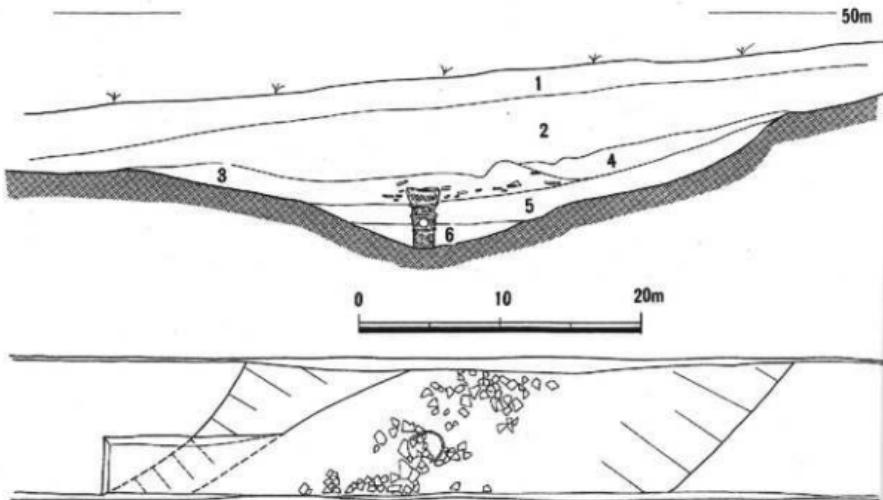


第11図 造山4号墳III区第2・第3・第4・第1トレンチ土層図



第12図 造山4号墳Ⅲ区第3トレンチ埴輪出土状態実測図

ガの間及びその上段に、対向方向を90度ずらし円形透孔が施されている。外面はナナメ方向のハケの後、タガを貼り付けている。基部外面には左下り7本、右下り2本によって構成されるヘラ記号が認められる。口縁部内面は粗いナナメ方向のハケの後、ヨコナデが施されている。胴部第2段の内面はタテハケの後ヨコハケ、第1段はヨコ方向ナデでタテハケメを消している。第1条タガの内面は指頭圧痕がめぐる、基部内面は底部調整がなされ、底面に向うほど薄く仕上げられ、ナナメ方向のハケメが認められる。なお内面は灰茶色で須恵器の肌を思わせるが、外面は明黄赤色を呈しもろい。(13)は第2トレンチの北壁沿から出土したもので、口縁部は欠損している。残存高31cm、基部の径16.5cmを測る。断面台形を呈すタガが3条認められる。ただし先のものと比較するとやや華奢な感じがする。胴部第1段及び2段に、対向方向を90度ずらして円形透孔が認められる。外面はタテハケの後、タガを貼り付けている。最下段のタガは「断続ナデ技法」によっており、基部外面のタテハケはタガ貼り付け後に施されている。第3条タガ付近内面は指頭圧痕が認められているが、指頭圧痕の底部にもハケメがあることから、タテハケの後第3条タガ貼り付けがなされたのであろう。第2段、第1段胴部内面はヨコナデが施されている。胴部第1段の下半はタテ方向にヘラ状工具による調整痕が認められる。基部内面は底部調整がなされ、底面に向かうほど薄く仕上げられ、ナナメ方向の粗いハケメが認められる。焼成は比較的良好で、内外面とも赤黄色を呈す。



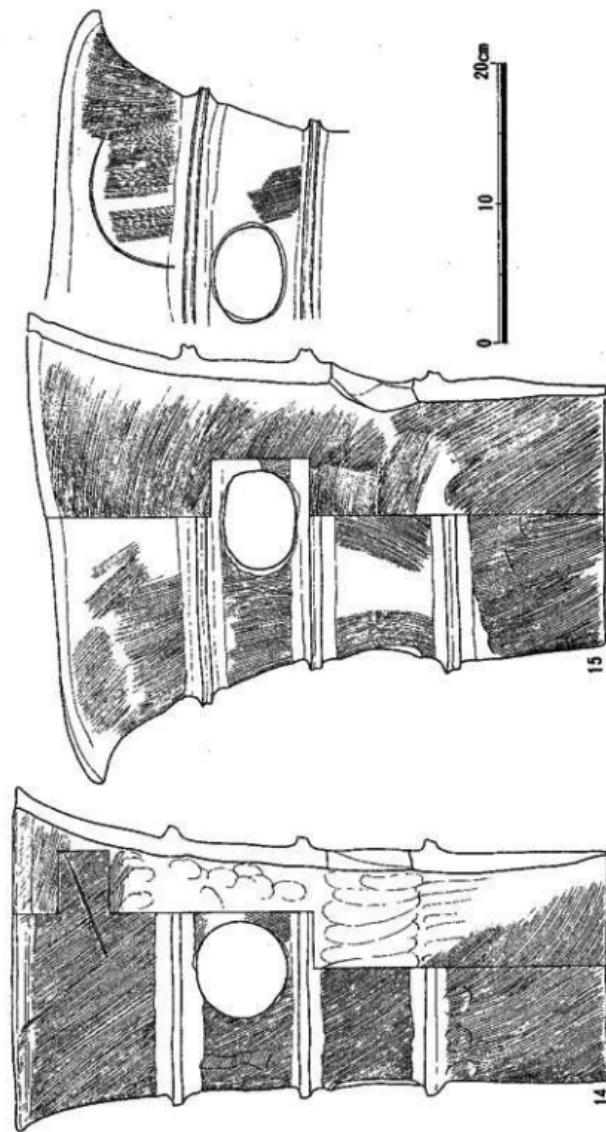
第13図 造山4号墳Ⅲ区第1トレンチ埴輪出土状態実測図

(9)Ⅲ区第3・4トレンチ 第2トレンチと第1トレンチの中間に設定したもので、東端では前記した溝状遺構の続きを確認、円筒形埴輪1本を検出した。また西側では表土を除去すると淡褐色土層がありその下は淡灰色と淡黄色が混在する層で、下方へいくほど明黄色に徐々に変化するものであった。

この明黄色土の上方は旧表土で、上層の淡褐色土は盛土の一部と推定された。この盛土中からは遺構・遺物は認められなかった。トレンチの東端で検出した溝状遺構は幅2.6m、表土から底面までは約1mを測る。トレンチ北壁沿で円筒形埴輪が直立したかたちで出土した。第2トレンチ内の円筒形埴輪の下半部は埋めもどされていたが、ここでは溝の底部を埴輪の形に約30cm掘り抜き、その円筒空穴に埴輪がはめ込まれている点に大きな相異がある。ここでは遺物包含層が深かったため耕作による搅乱は認められなかった。

(10)Ⅲ区第3トレンチ出土遺物 ここから出土した遺物は夥しい埴輪片と、直立した円筒形埴輪(第14図14)1本がある。直立てて出土した埴輪は完形品で、高さ42cm、基部径16cm、口縁は長径28cm、短径23.5cmを測る。断面台形を呈すタガが3条認められるが他のものと比較するとややシャープさに欠ける。胴部第1段及び2段に、対向方向を90度ずらして円形透孔が認められる。外面はタテハケの後、タガが貼り付けられている。最下段のタガの直下にはタテハケ以前の頑圧痕が認められる。

第14図 遠山4号墳Ⅲ区第3・第1トレンチ出土物実測図



口縁部外面にはタテハケの後に右上がりのヘラ記号が認められる。口縁部内面にはナナメハケの後ヨコハケが施されている。胴部第2段内面には指頭圧痕が認められ、第1段内面は「指ケズリ」基部内面は上方がヘラによるタテ方向の調整の後、ナナメハケが施されている。基部内面は底部調整がなされ、底面へ向かうほど薄く仕上げられている。焼成は比較的良好で、内外面とも明黄色を呈す。

⑩Ⅲ区第1トレンチ このトレンチは第3トレンチの南東に設定したものである。表土約20cmを除去すると、下は淡褐色土が約40cm堆積しており、この下層の暗灰色土中から夥しい埴輪片とともに直立する円筒形埴輪の口縁部が認められた。この円筒形埴輪の出土位置は、Ⅲ区第2、第3トレンチで確認しているところの溝状遺構の延長にあたる。円筒形埴輪の底面は溝状遺構底面中央に置かれ、周囲は地山土と同質の明黄色土でつきかためた状態となっていた。またこの土は内部下半にも詰め込まれていた、このような埋置の方法はⅢ区第2トレンチの埴輪埋置の方法をより徹底したかたちとなっている。

⑪Ⅲ区第1トレンチ出土遺物 ここから出土した遺物は夥しい埴輪片と、直立して出土した円筒形埴輪（第14図15）1本がある。これは完形品ではあるが、口縁部にかなりのゆがみが生じており、長径32.5cm短径23cm。基部径18cmを測る、断面台形を呈すタガが3条認められる。胴部第1段及び2段に、対向方向を90度ずらして円形透孔が認められる。外面はタテハケの後、タガが貼り付けられている。内面は基部がタテハケ、それより上部はヨコハケとしている。基部は底部調整がなされ、基底部は鋭利な刃物工具によって先端部が切り離されている。焼成は良好で淡灰色を呈し、須恵質となっている。口縁部外面には半円形のヘラ記号が認められた。

5. 小 結

以上調査の概要を述べてきたが、ここでは今回得られた成果を中心に若干の所見を述べて報告の小結としたい。

今回調査を実施した、造山4号墳墳頂と考えられていた場所から得られた資料は僅少で、いずれも埋葬に関係するとは考え難いものであった。

この場所が古墳として認識されたのは、『島根県遺跡目録』（昭和50年3月）に前方後円墳として記されていることなどから、昭和40年代未頃のことと考えられる、ところで調査結果は前述したように、『目録』に記されている内容を裏付けるものではなかった。このことはどのような根拠にもとづいて古墳と認識されるに至ったか、その経緯について過って考えなおす必要が生じてきたといえよう。

当時の関係者から直接事情を聞くことができないため、憶測の域を出ないが以下のよう点が考えられる。つまり、①Ⅲ区第2トレンチ内出土埴輪の上半部は耕作時の擾乱を受けており、当埴輪片が表採できた可能性は高い。②Ⅲ区各トレンチの西方は耕作によって崖状を呈し、当事も埴輪

片が表採できた可能性は高い。この①②によって西方の造山2号墳以外にも古墳が存在すると考えられたものの、埴輪を表採した地点は素直に考えるならば古墳築造にふさわしい場所とは言い難いものであった。したがって表採された埴輪片はその東方の高まり（今回調査を実施したII区・IV区一帯）に付属する可能性が高いと判断されたのではなかろうか。

いずれにしろ調査者としては、今回の調査をとおして造山4号墳は想定されていた規模や形態、さらに位置など、若干異なるもののその存在を確認したと考えている。

検出した4号墳の形態については、III区の3本のトレンチ内で検出された溝状遺構が第3トレンチ東端付近で大きく屈曲していること、さらに第1トレンチ中央付近に接する等高線に乱れがあることから方形プランが意図されていたものと推定される。ただし埋葬施設が未検出であることは別としても、この遺構を古墳とするか否かは即断の限りではない。それは円筒形埴輪は通常墳丘斜面、あるいはテラスに立て並べられるのに対し、ここでは①溝状遺構の底部に立て並べられている点、さらに②当地方では小規模な古墳に埴輪を1m間隔で立て並べる例はあまり知られていない、それに③地形からすると、ここが鞍部を呈し、古墳築造位置としては良好な場所とは言えない、といった点があげられる。古墳か否かという点は、いずれ周辺の全面調査を実施した後、その性格を検討すべきことであろう。

ところで検出された円筒形埴輪は4本と少量とはいえ、いずれも原位置を保ち、III区第1・第3トレンチ内のものは全形を知ることができるものであった。

これらは底部調整が施されていることから、川西編年V期に属するものと考えられた、この中には底部調整後、其底部を鋭利な刃物工具によって切り離されたもの（III区第1トレンチ出土埴輪）も含まれており、両者の共存が確認できたことは収穫の一つといえよう。

4本の円筒形埴輪は形態、調整さらに焼成などで相異点が認められる。III区第2トレンチ内出土のもの（第10図12・13）は形態・焼成は似ているが、12には第1条タガ付近内面にタガ貼付時の指頭圧痕が認められるのに対し、13はヘラ状工具によつたとみられるタテ方向の調整痕が認められ、また第1条タガは「断続ナヂ技法」となっている。

III区第3トレンチ内出土の円筒形埴輪（第14図14）は基部から胴部2段まで、ほぼ同径となっており、第3条タガから上部がゆるやかに外反しながら開く形となっている。他のものが第1段目から上に向って徐々に開く形となっているのと比較すると寸胴な感じがする。内面については、胴部の2段目から3段目にかけての調整痕は指頭によるものに限定されている。

第1トレンチ内出土円筒形埴輪（第14図15）は内面調整は全面ハケとなっており、基底部に切り離し技法が認められ、他と大きく異なるのは須恵質である点であろう。

このように同形の埴輪でありながら着しい相異点が認められるのは、複数の工房の所産である可

能性を示唆するものといえよう。

これらの諸点は後述する造山二号墳出土埴輪の技法とも合せ、検討する必要がある。概観する限りでは共通点が多い。造山2号墳埴輪からは埴輪片に混って、須恵器蓋付壺が出土している。それが山陰須恵器編年のⅡ期にあたり、造山4号の築造時期もそれとほぼ同時期と考えられる。

ところで最後になったが、今回の調査の結果、大きな問題が残ることとなった。つまり從来造山4号墳と称されてきた場所は造山2号墳の比較すると標高差がないことや、眺望が良好な点、さらにかなりの面積があることなど、大形古墳を築造するにふさわしい条件をそなえている。にもかかわらず頗著な遺構の存在は認められなかった事実をどのように解せばよいのであろうか、この点の評価は単に造山古墳群の問題にとどまらず、周辺の古墳群との関連性も含め今後改めて論議の対象となるべき内容といえよう。

註

- (1) 最近は「古墳群」とせず「墳墓群」と呼称されることが多いが、国指定史跡名で表現した。
- (2) 近年確認された5号墳があるが、距離がはなれており、群を構成する古墳となるかどうかは検討を要するものである。
- (3) 『安来市誌』 1970
- (4) 『造山3号墳発掘調査報告書』 1967島根県教育委員会
- (5) (3)と同じ
- (6) 『出雲・隠岐』
- (7) 『安来市内遺跡分布調査報告書』、1991安来市教育委員会 遺跡番号 493-1
- (8) (3)と同じ
- (9) (3)と同じ
- (10) 墓輪の部分名称については吉田恵二「埴輪生産の復原」、『考古学研究』第19卷第3号1973
- (11) 川西宏幸「円筒埴輪紀論」、『考古学雑誌』第64巻第2号 1978
- (12) 山本清「山陰の須恵器」、『島根大学創立10周年記念論文集』 1960

付編 造山2号墳発掘調査

例　　言

1. 本書は安来市教育委員会が平成2年度に実施した、安来市荒島町に所在する造山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 今回報告する造山2号墳は島根県遺跡番号A66-2・安来市の遺跡番号66-2で、所在する地籍は安来市荒島町字造山3153番地である。
3. 発掘調査組織は以下のとおりである。

調査主体 安来市教育委員会

調査指導 門脇等玄(安来市文化財保護委員)、野津弘謙(同)、東森市良(同)、横山純夫(同)、渡辺貞幸(島根大学法文学部教授)

事務局 三島俊夫(安来市教育委員会教育長)、高塚輝雄(安来市教育委員会生涯学習課長)

調査員 三宅博士(安来市教育委員会生涯学習課文化係)、氷見英(同)

4. 発掘調査に際しては門脇キミヨ・池田熙・佐々木頼俊・仲佐勝美・鈴木博也・岩田麻友子氏など土地所有をはじめ地元の方々には終始多大なご協力をいただいた。また伯太町教育委員会花田明巳・妹尾秀樹氏には現地で直接調査にご協力いただいた。
5. 出土遺物については安来市教育委員会で保管している。
6. 本書の挿図中の方位は真北を指す。
7. 本書の執筆・編集は上記調査指導の先生の助言を得ながら、三宅が行なった。

(1) 調査の概要

平成2年度の発掘調査は造山古墳群の整備事業に先立ち、整備の手法などを検討するための基礎資料を得る目的で、平成3年3月13日から同年3月31日まで実施した。

整備については古墳群全体に、遊歩道や広場さらに工事用道路も兼たサービス道路などの計画もあったので、まず各所における遺構の有無の確認が急がれた。そこで調査は幅2m・長さ5mから10mのトレンチを計9ヶ所設定して実施した。

結果は造山2号墳前方部に設定した3ヶ所のトレンチから得られた事実を中心に、その概要を記すこととする。

造山2号墳は全長約50mを測る前方後方墳で、現状は前方部1段・後方部2段となっている。後方部は1辺30m・高さ5m・頂辺は10m・12mを測る。後方部の北に面した墳丘斜面及び、東に面した部分は残存状態は良好で、築造当時の形態をよく保っているものと判断された。ただ墳頂部は東方隅の一部を除き、南西方向に向って墳丘は大きく削平を受けている。一方前方部墳端斜面及び、北面する部分には石積が整然と認められるが、これは後世再構築された可能性が高いものであった。

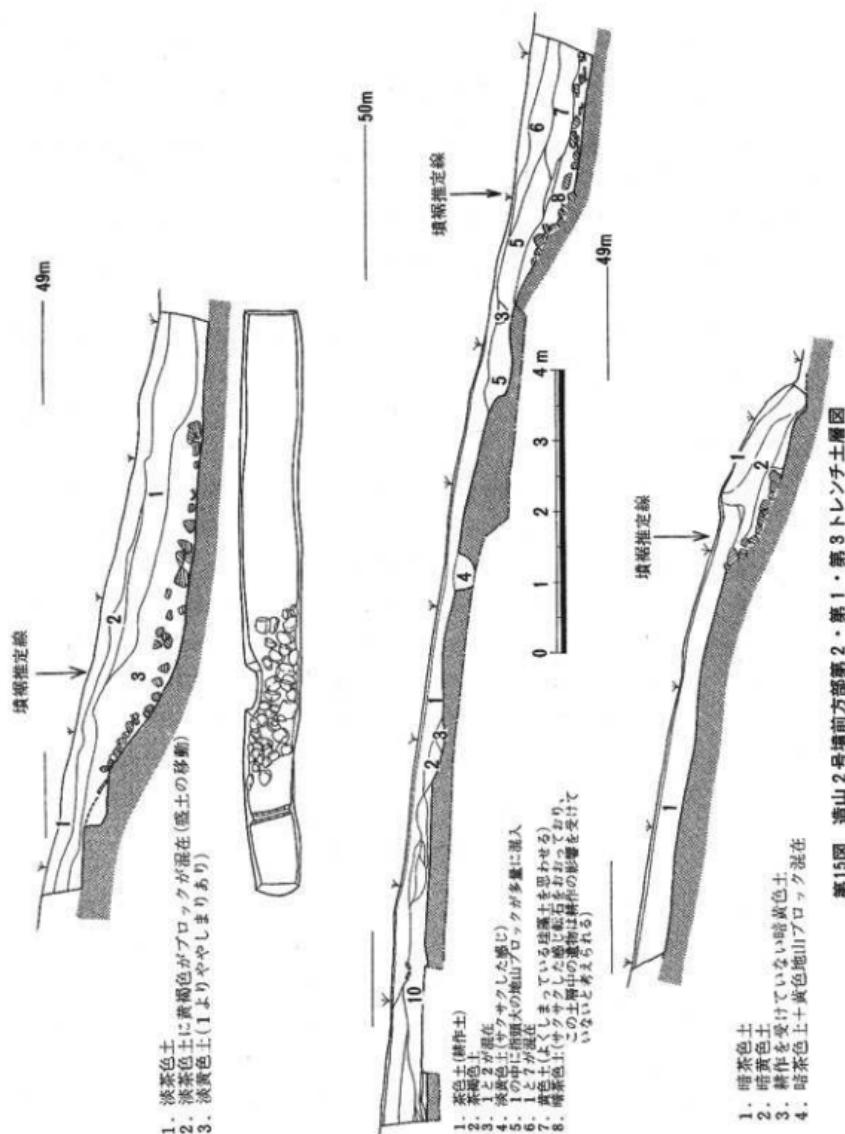
前方部の南面する部分は墳丘斜面が南に向ってなだらかに削平され、旧状をとどめるものではなかった。しかし、墳丘の削平は上方から墳裾を埋めるかたちで行なわれたと推定され、地中にある墳裾は大きな改変を受けていないと推定された。墳丘上方は削平を受けているとは言え、墳裾線が検出できたならば、墳丘平面形態の復元や整備のための基礎資料として重要なものと考えられた。

そこで前方部南側斜面に、墳丘主軸に直交するかたちで第1トレンチを、その東側に第2トレンチ、西側に第3トレンチをそれぞれ設定した。

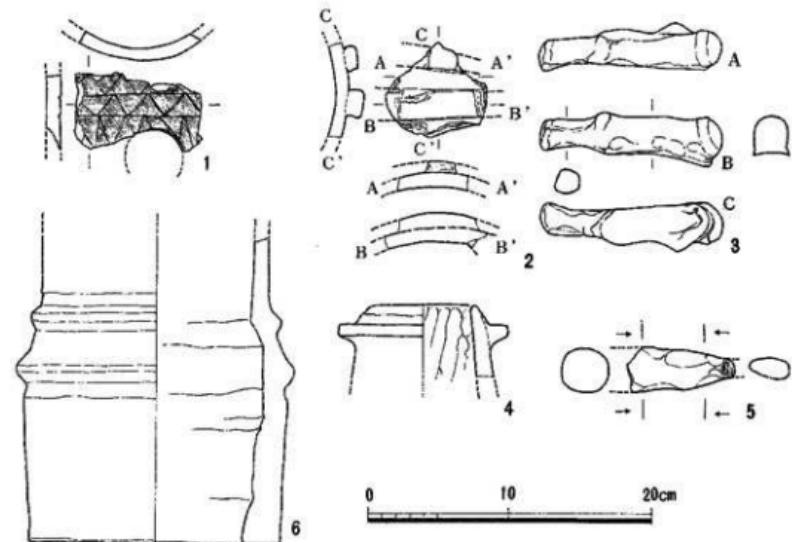
(2) 検出した遺構と遺物

造山2号墳第2トレンチ このトレンチは前方部の南側斜面、くびれよりに設定したものである。

トレンチの北端部は植林などによる攪乱が墳丘盛土下の南側斜面にまで及び、表土下の淡茶色土に黄褐色ブロックが混在する層は盛土が攪乱を受けたものと判断された。トレンチの中央より南半は地山面からやや浮いた状態で、夥しい量の人頭大河原石が認められた。これらの河原石は墳丘斜面から転落した葺石で、これを覆う淡黄色土は攪乱を受けていないと判断された。このことから葺石の転落は2号墳築造後の、墳裾に流水が厚く堆積する以前と推定された。なお2号墳第2トレンチ平面図(第15図)は、転落したと判断される葺石を除去した時点でのものである。したがって、図示した石材は一応原位置を保っていると判断したものである。これらの石材の下端あたりから約35度の角度で徐々に立ち上がる傾斜となっており、この傾斜変換点付近が墳裾線と推定された。



第15図 造成2号墳前方部第2・第1・第3トレーン土層図

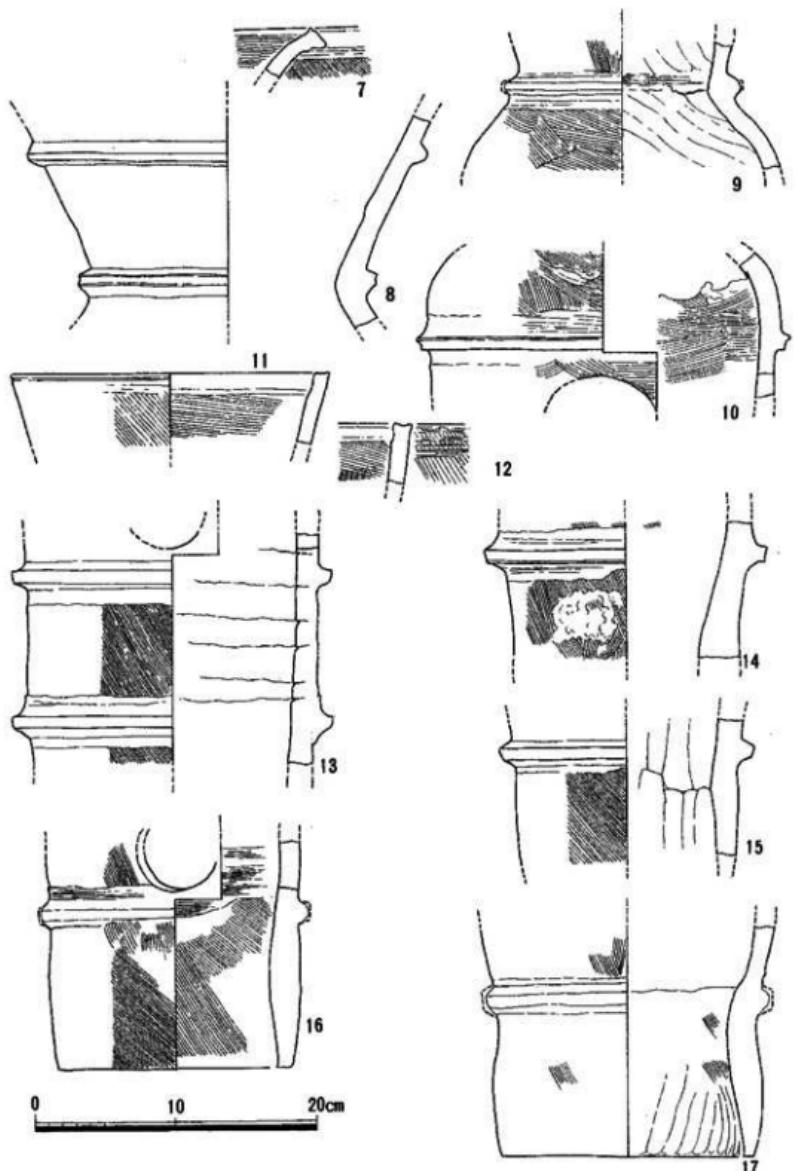


第16図 造山2号墳第3トレンチ内出土埴輪実測図

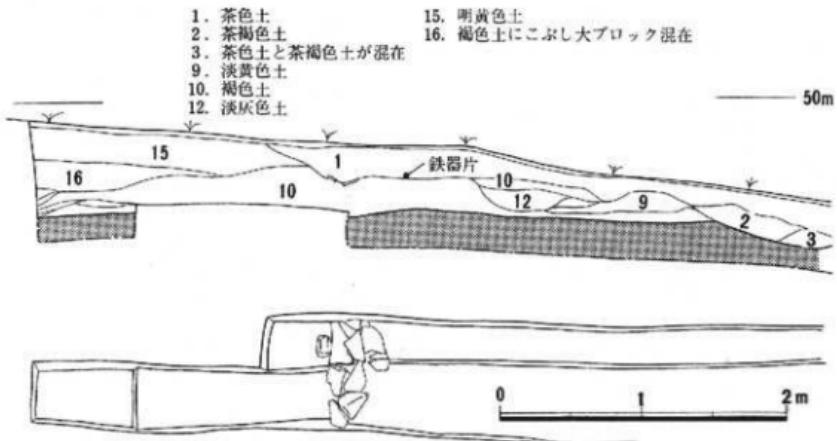
造山2号墳第2トレンチ出土遺物 このトレンチ内からは多数の埴輪片が出土したがいずれも完形に復すことのできないものであった。以下特徴のあるものを中心に記すことにする。埴輪片はいずれも風化が著しく、淡黄色あるいは褐色を呈し、頗る須恵器となるものは認められなかった。

それらの中にはいわゆる形象埴輪となるもの（第16図）がある。（1）は円筒形の外面に鋸歯文状の装飾を施すもので、円形の透し穴が認められる。鋸歯文状の装飾は、斜め方向のハケ調整の後、ヘラ状工具によってなされ、模線（先）一鋸歯文（後）という関係が認められた。（2）も円筒状を呈すものの外面に断面方形の粘土帯を貼り付けている。小片のため形態は不明である。（3）は棒状を呈すもので、Aは上面観・Bは側面観・Cは裏面観である、断面カマボコ形を呈し、裏面は剥離面が認められる。（4）は先細りとなる円筒状の外縁に鈎状の突起をめぐらすものである。内面にはタテ方向の指頭ナデ痕が認められる。（5）は棒状を呈すもので、両端とも欠損している。一方が太く、他の方はやや細くなっている。人物の手、あるいは小動物の脚を思わせる。

（6）は全体にかなりの風化が認められる円筒で、基底部から12~17cmの間に2条のタガがめぐらされている。基底部径は約18cmを測るが、2段のタガの中間あたりから若干細くしぶりこまれ、その径は約16cmと推定される。底部調整が認められないことや、接近して2条のタガが施されていることを合せ考えると、形象埴輪の下半部と推定される。



第17図 造山2号墳第2トレンチ内出土埴輪実測図



第18図 造山2号墳第1トレンチ北端部遺構検出実測図

このトレンチからは他に朝顔形埴輪・円筒形埴輪が出土している。このうち最も多いのは後者で約9割以上をくめるものと推定される。

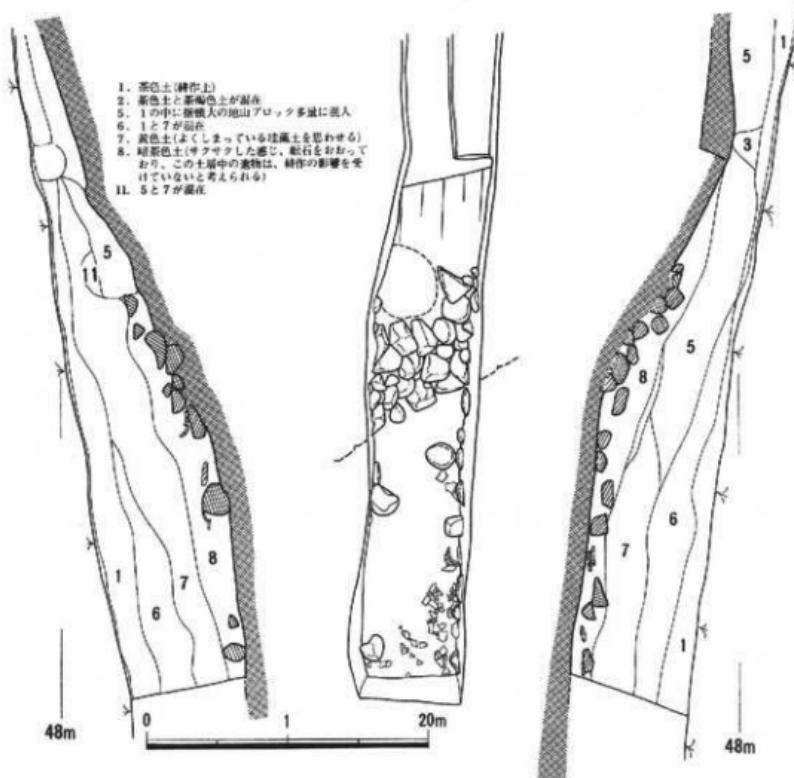
朝顔形埴輪で図示できるものはきわめて少なく(第17図7~10)があるにすぎない。(7~9)のタガは風化が著しく、原形をとどめていない。風化が認められない(10)はタガの稜線もシャープであるが他のものと比較すると華奢な感じがする。このタガは肩部より若干下方にめぐらされており、その下方には円形の透穴の一部が認められる。

(11~12)は円筒形埴輪の口縁部の破片である。内面はヨコハケに近いナナメハケ・外面はナナメハケの後、口縁端部はヨコナデとなっており、先の朝顔形埴輪片と共に通している。

(13~17)は円筒形を呈す埴輪片で、(13)は胴部1段目の破片と考えられる。他は基底部の破片と推定される。(14)は下方を欠損しているが、器肉が厚いことが注意される。(15~17)は底部調整がなされ、特に(16)は基底部に鋭利な刃物工具によって切り離された痕跡が認められる。

2号墳第1トレンチ このトレンチは第2トレンチの西方に設定したもので、北端部では埋葬施設の一部と推定される石材を、南端部では葺石や土器留を検出した。

トレンチ北端部付近で検出した埋葬施設と推定したものは板状石材が集中するもので、これは(第18図)に示すように耕作時に擾乱されたと判断される茶色土層の最下端に貼り付くかたちで認められた。ここでは1の茶色土より下の層は墳丘の盛土で、耕作の影響を受けていないものと判断され、先の板状石材は墳丘盛土中に掘り込まれたものと考えられるが、掘方や埋葬施設の上部は検出できなかった。おそらく耕作時に消失したものであろう。この石材の南方約35cmの位置で、耕作によっ



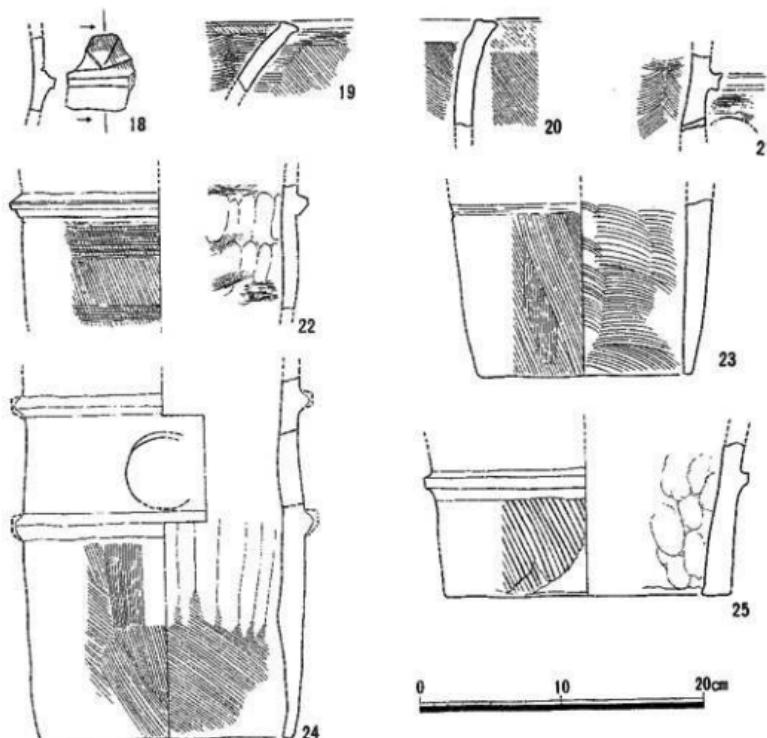
第19図 造山2号墳第1トレンチ南端部遺物出土状態実測図

て削平された盛土上面で、鐵鎌1が出土した。

もとより原位置ではないが、板状石材が集中する近くから出土したことは、この中に副葬されていた可能性を示唆するものといえる。

2号墳第1トレンチ南端部では葺石が一部原位置を保った状態で認められた。(第19図)で示すように耕作の影響はかなり深くまで達しているが、8層の暗茶色土までは至っていないと判断された。

したがってトレンチ東壁に沿って認められた土器溜の資料は8層に覆われた良好な一括資料ということができよう。トレンチ西壁では7層の黄色土中から銅板片、5層の茶色土中から染付片が出土した。また5層は平面図に示した葺石抜き取り痕跡と一致したことから、抜き取りが行なわれたのが近世以後であろうと推定された。検出された葺石の石材は原位置を保っていると判断され、下端あたりから約40度の角度で徐々に立ち上がるかたちとなっており、石材の下端を結んだラインを



第20図 造山2号墳第1トレンチ内出土埴輪実測図

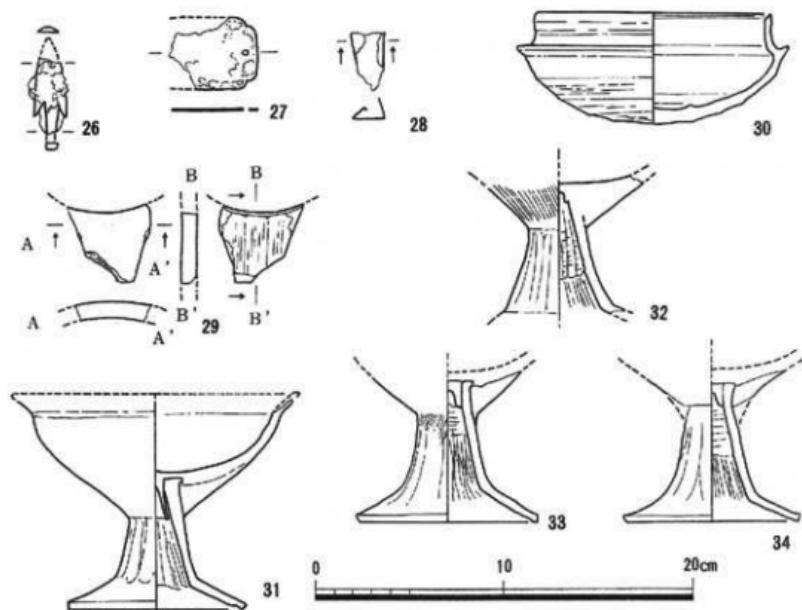
埴輪と想定して大過ないと思われた。

2号墳第1トレンチ出土遺物 このトレンチ内からは南端部つまり、埴輪部と想定する位置から埴輪片・土師器高杯・須恵器蓋付杯の身が出土した。以下埴輪から順次その特徴を記すことにしたい。(18) タガ部の小片であるが、(第16図1)に類似したヘラ状工具による刻線が認められる。接点はないものの、器厚・胎土・色調などからすると同一個体となる可能性は大きい。

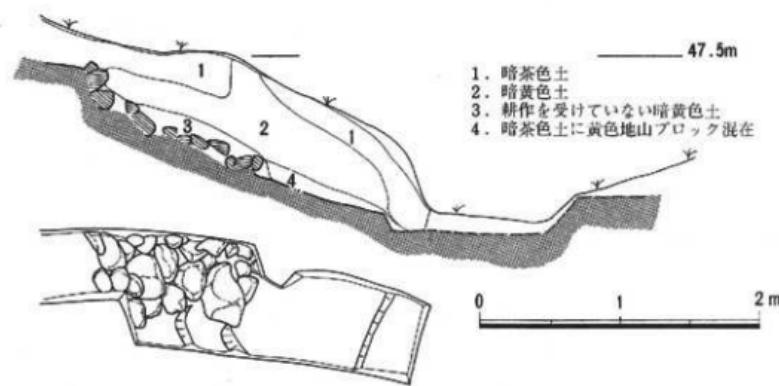
(19) は朝顔形埴輪の口縁部であるが、(20) は小片であるため朝顔形となるか円筒形となるかは断定しがたい。(22) は円筒形を呈すものであるが、タガを貼付けた後にヨコハケが施されている。

そのため、タガの下端にハケの一端が触れたとみられ、一種の段が付いたかたちとなっている。

(23・24) は円筒形埴輪の下半部であるが、いずれも底部調整が施されている。(24) は基底部内



第21図 造山2号墳第1トレンチ出土金属器・土器実測図



第22図 造山2号墳第3トレンチ南端部遺構検出実測図

面は上方が指頭によるタテ方向ナデ、その後下方をナナメハケで整えられている。(25)は円筒形を呈すものであるが、内面は指頭痕が認められ底部調整は施されていない。さらに大きな特徴として基底部から第1条タガまでの距離が8cmときわめて短いことが注意される。

(26)は第1トレンチ北端部の耕作によって削平された盛土上面で認められた鉄鎌である。先端と茎部分を欠損しているものの平根式のわたぐりの深い形となっている。(27)は7層黄色土中から出土したもので、一端は欠損しているが厚さ1.5mmを測る鉄板の隅に「L」字形の切り欠きが施されている。残存する一辺の中央付近には径約2mmを測る小孔があけられている。(28)は断面略「コ」の字形を呈す鋼板で、これが製品の形態を示すのか否か判断はしがたい。(27・28)は耕作土中から出土したもので、2号墳に伴うものか否かも判断したい。(29)は横断面が弧をえがくので、円筒形を呈すものと推定される。上に向けた部分には円形の透し穴とみられる加工が施され、内面はタテ方向へ削りとなっている。このような土器片は他のトレンチでも認められず、あるいは2号墳とは関係ない遺物の可能性もある。(30)は須恵器蓋付壺の身ではほぼ全形をうかがうことができるものである。内外面とも淡灰色を呈し、焼成は良好である。口縁立ち上がりは比較的急で、外面のヘラ削りも入念であるが、全体の形態からすると山陰の須恵器編年でいうところのⅡ期に属するものと考えられる。(31~34)は土師器高壺で壺部は上方に向かってゆるやかに開き、口縁部付近で一種のアクセントをもつて外反しておさまるかたちのものである。脚の筒部外面には風化をまぬがれた一部にヘラ磨きが見られる。

造山2号墳第3トレンチ このトレンチは前方部南西の最も西側に設定したもので、南端部で葺石の一部を検出した。石材は一部抜き取られた部分もあるが、ほとんどが原位置を保っていると判断された。このトレンチでは赤色顔料塊約20gが耕作土中から出土した。

6. まとめ

以上調査の概要を述べてきたが、ここでは2ヶ年にわたる調査成果を中心に若干の所見を記して報告の結びとしたい。

2ヶ年にわたる調査成果とし特記すべきこととしては、造山4号墳・同2号墳とも所属時期を決定することができる資料を得ることができたことであろう。

造山4号墳では溝状造構から出土した円筒形埴輪4本がある。これは底部調整が認められ、さらにⅢ区第1トレンチ内出土のものには底部調整後、基底部下端の切削が行なわれている。これらの埴輪は製作技法から川西編年でいうところのV期に属するものと考えられる。

一方造山2号墳でも埴輪は破片ではあるが多数出土しており、初期形埴輪・円筒形埴輪・形象埴輪などの存在が知られ、これらも川西編年のV期に属するものであった。このうち円筒形埴輪は造山

4号墳と同様、底部調整及び調整後基底部下端の切除の技法が認められた。このことから、造山4号墳と造山2号墳の築造時期はほぼ同じと判断された。

造山2号墳ではこれらの埴輪とともに、須恵器蓋付壺の身及び土師器高杯が出土した。須恵器は山陰の須恵器編年でいうところのⅡ期に属するものであった。

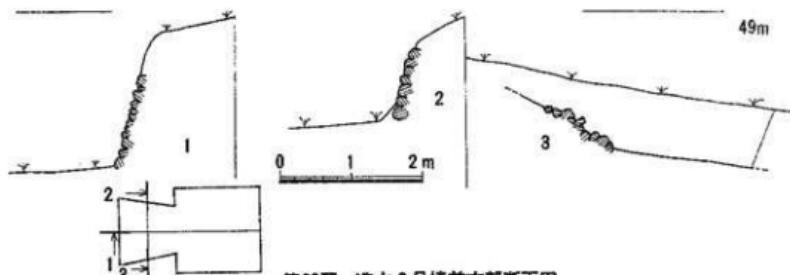
ところで近年発掘された松江市古曾志大谷1号墳では、山陰の須恵器編年のⅠ期にあたる須恵器群が出土しており、これに伴う円筒形埴輪は底部調整後「基底部下端を工具で平滑に切りとる」技法がほとんど例外なく認められている。

のことから山陰の須恵器編年Ⅰ期の時期に、円筒形埴輪基底部下端を切除する技法が行なわれ、Ⅱ期の時期（造山2号・同4号墳築造時期）には、その技法が省略化され、一遺跡内におけるそれが占る比率は僅少となりつつあったとみることができよう。

以上埴輪の製作技法から造山2号墳・同4号墳はほぼ同時期と考えられるものであるとしたが、ここで一つ問題となるのは造山4号墳とした埴輪を伴う遺構の存在である。つまり、小結でも若干記したが(1)埴輪が溝状遺構の底部中央に立て並べられている。(2)当方で小規模古墳に埴輪を立て並べる例は僅少である。(3)地形からすると古墳築造の場所としては良好とはいえない。などの古墳と言ひきるには躊躇せざるをえない問題点がある。これらのうち(3)については従来造山4号墳と考えられていた位置が適地であることは言をまたないであろう。

ところで、造山4号墳については、造山1号墳・同3号墳・同2号墳のように当地を代表する首長墓群の中にさして大きくもないものが1基だけ、しかも突如として出現しているように見ることもできる。しかし、この点について前記した諸点を合せ考えると、今回造山4号墳Ⅲ区で検出した埴輪に囲まれた区域は、造山2号墳の付属施設的な意図によって作られたのではなかろうかと推定される。ただ造山4号墳についてはトレンチ調査という限定された部分的調査であるので、今後全面調査を実施した段階で論議・検討すべき事柄といえよう。

造山2号墳については前方部の南面付近にトレンチを3本設定して実施したが、いずれのトレン



第23図 造山2号墳前方部断面図

チ内でも墳裾と考えられる部分が検出された。ここで注意すべきは前方部北辺及び前方部末端部の石積みと、調査によって認められた蓋石と比較すると、その立ち上がり角度に大差があることであろう。

この点を図示したのが（第23図）で、(1)が前方部の末端部を主軸方向で測った断面、(2)は前方部の第1トレーナーを北方へ延長した断面、(3)は第1トレーナーで検出された墳裾の断面である。(3)以外の現状は露出しており、いずれも後世のものであろうと考えられたが、(2)の石積み下端の地表高が(3)の墳裾線と比較すると若干上方にあって、前方部北辺の墳裾線が土中に埋没している可能性はきわめて高い。たとえ蓋石は抜き取られていたとしても、墳裾線の何らかの痕跡が検出できれば、造山2号墳の墳丘プラン復元に重要な手がかりを提供するであろうことは言をまたない。

以上の諸点を含め、今後に期すべき問題点は多いものの、それはいずれもこの造山古墳群の問題にとどまらず、古代山雲の歴史の実像にせまる重要な課題ということができよう。

註

- (1) 原田律夫氏は「出雲の大型円墳について」『季刊文化財』第38号1980で、この石積を築造当初のものと認識されて分類されているが、今回は後世の再構築と判断した。
- (2) 造山2号墳の主軸を前もって設定していたが、そのライン上であることが注意される。
- (3) 山本清 「山陰の須恵器」『島根大学開学10周年記念論文集』1980
- (4) 成分分析を行なってはいないが、自然に生じたとは考えられないほどあざやかな赤色を示す。
- (5) 川西宏泰 「円筒埴輪統論」『考古学雑誌』第62巻第2号 1978
- (6) 「古曾志遺跡群発掘調査報告書」 島根県教育委員会 1989



図版 1

調査前の造山4号墳Ⅱ区
(南方から)



造山4号墳Ⅱ区第2トレンチ
(南方から)



造山4号墳Ⅳ区第1トレンチ
須恵器片、滑石製品出土状態
(東方から)



図版2

造山4号墳Ⅲ区
トレンチ配置状況
(北東方向から)



造山4号墳Ⅲ区第2トレンチ
埴輪出土状況
(東方から)



造山4号墳Ⅲ区第3トレンチ
埴輪出土状況
(東方から)



図版3

造山4号墳Ⅲ区第4トレンチ
旧表土検出状況
(南東方向から)



造山4号墳Ⅲ区第4トレンチ
墳丘崩壊状況
(南方から)



造山4号墳Ⅲ区第1トレンチ
埴輪出土状況
(南西方向から)



図版 4

造山2号墳前方部
第2トレンチ
葺石検出状況
(南西方向から)



造山2号墳前方部
第1トレンチ
盛土及び埋葬施設
検出状況
(西方から)



造山2号墳前方部第1トレンチ
南端部遺物出土状況
(北西方向から)



図版5



造山2号墳前方部第1トレンチ
葺石検出状況
(北東方向から)



造山2号墳前方部第1トレンチ
葺石検出状況
(南西方向から)



造山2号墳前方部第3トレンチ
葺石検出状況
(南西方向から)



平成4年3月19日印刷
平成4年3月31日発行

安来市造山古墳群発掘調査報告書

発行 安来市教育委員会
安来市安来町
印刷 (株)松浦印刷
安来市安来町1181